

釧路市立小中学校のあり方検討委員会（第3回 2021年11月2日開催）

■発言要旨

委員：釧路市の今後の人口推計はどうなっているのか。

事務局：釧路市まち・ひと・しごと創生総合戦略の中では2040年には釧路市全体の人口が138,000人という推計になっている。

委員：前回の市の適正配置計画では、小学校同士や中学校同士の統廃合を行ったが、中1ギャップなどの課題を聞くと、義務教育学校とか小中一貫校の方が良いというか、いかざるをえないかと思うが可能性としてはどうなのか。

委員：統廃合前提ではなく、課題の中1ギャップなどを克服し、乗り越える1つの解決策として義務教育学校や小中一貫校があるのではないか。この委員会の中で議論を進めていくのが良い。

委員：釧路市としてどうあるべきか非常に重要かと思う。

委員：学力の点では、中学校の授業スタイルに課題が大きくあるのではないか。子どもたちの学ぶ意義や意欲の面を育てる必要があると思う。学校・教師・児童生徒が学び方そのものを変えていく必要があると考える。

委員：学級数が減ると教員の数も減ってしまう。学力向上には教員の指導力が必要で、そのためにも、教員数は必要だと考える。

委員：教員の数は文科省で指定されるので難しいと思うが、その補填として地域をどう活用していくかが今後のテーマになると思う。教育大・公立大・高専といった高等機関との協力により学生たちを積極的に活用していくのはどうか。今後統廃合など学校の数进行调整するのであれば経費も浮いてくる可能性もあるため、そういった経費を人的要素にどれだけ充てられるかという点も今後出てくると思う。

委員：小中一貫教育や義務教育学校化などにより、学校内で上級生が下級生を助けたり、地域、学生、様々な刺激を取り入れながら進めることが重要だと考える。

委員：高校生を見てみると、全てにおいて学力が低いとは思わないが、数学の活用が出来ない点を感じている。数と式が出来ないまま、中学校に上がっている。また、気になる点例えば、小さな中学校から進学してくる生徒が、これまでの環境とこうって変わり生徒数が多くなり、教師との関わりが少なくなって、疎外されていると感じている部分があるように見受けられる。

委員：中1ギャップは学ぶスタイルが大きく転換することで不登校といった問題のきっかけになるという指摘もある。小6から中1の変化より、教員が9年間、中学校の先生が小学生の時の姿を見れていないという現状なので、中1ギャップの問題は、小中一貫教育や小学校と中学校の連携という事を考えて行くことが大事ではないか。

委員：学校の取組と家庭の取組が違っているという点が問題ではないか。中学校になったら、という準備段階を家庭で長い時間をかけて行うという意識が低いと感じる。学校だけではなく、家庭の意識も上げていければ学校と家庭の差が埋まっていくのではないか。

委員：中学生になると勉強が難しくなる。また部活・塾などで子ども達も多忙になる。親も学校の勉強が1番大事という点を理解して、塾に行っていれば大丈夫という気持ちを変えて行かないといけないのではないかと思う。

委員：家庭学習を習慣付けることが大事だと思うが、そこが1番難しいところでもある。

委員：過干渉な保護者がいる一方、手放し状態の保護者もいるなど、家庭教育に対するギャップ感は大きいと思う。市教委が、コミュニティ・スクールを通して地域を巻き込んで小中連携を取ろうと小中学校の合同研修を数回行っている。大楽毛地域では、子ども達の心の状態やいじめ・学校が居心地の良い場になっているかといったアセスメント検査をし、データを小中連携で活用している。学校の頑張りを家庭に発することで、保護者の意識も変えられるのではないか。

委員：コミュニティ・スクールのように地域や家庭を巻き込んだ学校改革が必要だと思う。

委員：小学校の劣化状況評価ではA（概ね良好）が多いが、中学校はC（広範囲に劣化）やD（改善の検討が必要）が多いという印象がある。何か理由があるのか。

事務局：小学校・中学校の区別はないが、A評価の学校は耐震化が未完了だったため、近年改修工事を行ったところであり、C,D評価の学校は1980年代に建てられた学校で耐震化の対応が出来ているため、今後の施設整備が課題となる学校である。

委員：統廃合などで、C評価の学校の改修が後回しになっていく可能性はあるのか。統廃合で空いた学校を、不登校の子ども達のための学校にすることも1つの方策かなと考える。

委員：スクールバスは、市内でどれくらい運行しているのか。また経費はどのくらいか。

事務局：大楽毛小中学校区域と、桜が丘・東雲小学校区域、阿寒・阿寒湖・音別地区で運行している。また経費は年間委託料で約5千万円となっている。

委員：生徒数が少なくなった場合、先生と生徒の関わりは大きくなるが、生徒同士の関わりが少なくなるデメリットが出てくる。自分で問題を解決しようという思いは、小学校・中学校の関わりの中で上手く行ったりいかなかったりを繰り返しながら出来上がってくると感じている。どの程度の規模の中で生徒が育っていくのが良いかということを分析すると、集団の規模の理想形が見えてくるのではないか。